

「上部尿路腫瘍における Rac1, Pak1 発現の臨床的意義: 予後診断マーカー、治療ターゲットとしての可能性」のお知らせとお願い

腎盂癌・尿管癌といった上部尿路腫瘍では、特異性の高い診断マーカーや予後を予測する有用なマーカーの開発が課題の 1 つとされています。また、同じく尿路上皮腫瘍である膀胱癌に対しては術前化学療法の実施も治療選択肢の 1 つではありますが、上部尿路腫瘍に対しては手術療法と術後化学療法以外に治療効果を得ることの出来る治療手段がないのが現状と言えます

p21-activated kinase (Pak)ファミリーは、細胞増殖や細胞骨格の再構成、アポトーシスシグナル伝達における主要なタンパクであり、中でも Pak1 は種々の癌腫における発現増強や高活性の報告があり、膀胱癌における膀胱内再発の予測因子としても報告されています。また Rac1 はその Pak1 と同シグナル伝達経路の上流に位置する GTPase ファミリーの一員で、Pak1 を制御して細胞骨格形成の活性化や細胞接着に関与しており、これら 2 つのタンパクが癌治療における潜在的なターゲットであることが種々の論文で報告されています。しかし上部尿路腫瘍におけるこれらのタンパクの臨床的意義についてはほとんど報告されていないのが現状であります。

今回我々は 2013 年 10 月までに防衛医科大学校病院泌尿器科で行われた腎尿管摘除術の切除標本を、Rac1, Pak1 に対する抗体を用いて免疫組織化学的染色を行い、上部尿路腫瘍における Rac1, Pak1 の発現強度と臨床病理学的データの関連性、再発や転移、予後との関連性につき検討します。具体的には Rac1, Pak1 発現の上部尿路腫瘍における膀胱内あるいは膀胱外再発の予後診断マーカーとしての統計学的有意差を検討します。また、これら 2 つのタンパク発現を含む他の臨床病理学的因子についても同様に統計学的に検討します。

本研究は、今後研究のために患者さんから検体を採取したり、投薬をしたりすることはなく、これまでの外来及び入院治療での既存資料のみを用いる研究です。患者さんの臨床データおよび Rac1, Pak1 の発現強度等のデータは ID 等個人情報とは無関係な番号付与による匿名化された状態で管理され、その他通常の診療と同様にプライバシーが保護されます。また、2013 年 10 月以前に防衛医科大学校病院泌尿器科で上部尿路腫瘍に対して腎尿管摘除術が行われた方で、御自身の治療経過等の臨床データを研究に使わないで欲しい、という御希望があれば下記連絡先まで御連絡頂けますようお願い致します。

なお、研究への使用の拒否の意思を表明されても、防衛医科大学校病院泌尿器科における診療には全く何の影響もなく、いかなる意味においても不利益を被ることはありません。

連絡先: 防衛医科大学校病院泌尿器科

黒田 健司

Tel: 04-2995-1211(内線 2392)